

9. ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラフィにて興味ある所見を呈した悪性リンパ腫の一例

小野 恵 小原 東也 高橋 恒男
柳澤 融 (岩手医大・放)

症例は72歳の女性で、ワルダイエル輪原発 stage IIAにて頸部放射線治療ならびに化学療法 CHOP 4クール、3AP-BLM 2クール(合計 CPA 2,800 mg, ADM 300 mg, VDS 8 mg, MTX 50 mg, ACNU 100 mg, BLM 100 mg)を施行された。この症例に対し ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラフィが施行されたが心領域に全く集積が見られなかった。冠動脈疾患の危険因子、DM、自律神経障害はなく、胸部 X-P, ECG, ^{201}Tl -SPECT, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-D 心プールシンチグラフィでは、心臓に関する異常は指摘されなかった。心交感神経末端での異常が示唆され、抗癌剤多剤併用による心毒性が考えられた。

10. 褐色細胞腫の診断における ^{123}I -MIBG シンチグラフィの有用性

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 加藤千恵次
中駄 邦博 藤森 研司 古館 正從
(北大・核)

^{123}I -MIBG はノルアドレナリン誘導体でありクロム親和性組織に集積することから ^{131}I -MIBG 同様褐色細胞腫の診断に有効とされている。褐色細胞腫が疑われた5例に対し ^{123}I -MIBG シンチグラフィを施行し、4時間像および24時間像の撮像を行った。5例中3例に集積が認められた。正常副腎は4例で描出された。また血中ノルアドレナリンレベルと心筋描出には負の相関が認められた。 ^{123}I -MIBG シンチグラフィは ^{131}I -MIBG 同様褐色細胞腫に対し特異的に集積し、その画像は良好であった。

11. ^{131}I -アドステロール副腎皮質シンチグラフィによる副腎腫瘍性病変の検討

木原 好則 清野 泰之
(長岡赤十字病院・放)
高橋 直也 小田野行男 酒井 邦夫
(新潟大・放)

CT等で片側副腎に腫瘍を認めた27症例(原発性アル

ドステロン症9例, Cushing 症候群6例, 褐色細胞腫3例, 転移性腫瘍3例, 非機能性副腎癌1例, 非機能性皮質腺腫5例)に対し ^{131}I -アドステロール副腎皮質シンチグラフィを行い、腫瘍側への集積状態により高集積, 正常集積, 低集積・欠損の3群に分類し、良悪性の鑑別について検討した。腫瘍側高集積像を呈した17例は全例、良性腫瘍であり、副腎癌・転移性悪性腫瘍は、全例、腫瘍側低集積・欠損像を示した。褐色細胞腫は腫瘍径により、正常集積または腫瘍側低集積・欠損像を示した。副腎腫瘍に対して、副腎皮質シンチは、その良悪性の鑑別に、有効な検査であると考えられた。

12. ^{201}Tl シンチグラフィによる縦隔腫瘍の診断

中駄 邦博 加藤千恵次 鐘ヶ江香久子
伊藤 和夫 古館 正從 (北大・核)

縦隔腫瘍13症例に対して ^{201}Tl シンチグラフィを施行しその有用性について検討した。対象例中、悪性腫瘍の陽性率は100%(4/4)であったが、良性腫瘍も55.6%(5/9)が陽性となり、全体の accuracy は61.5%(8/13)であった。また、nodule/background ratio や retention index による評価でも良性腫瘍と悪性腫瘍との間に有意差は認めなかった。しかし、8症例で ^{67}Ga シンチグラフィと結果を比較したところ、 ^{67}Ga 陽性・ ^{201}Tl 陰性例は認めなかったが、 ^{67}Ga 陰性・ ^{201}Tl 陽性例は2例みられた。また、腫瘍への ^{201}Tl の集積とMRIのGd-DTPAによる造影効果や腫瘍組織中のPCNA陽性率との間には関連性がみられた。 ^{201}Tl シンチグラフィから縦隔腫瘍の良悪を鑑別することは困難と考えられたが、腫瘍の性状に関する有用な情報を得ることが可能と思われた。

13. 骨軟部組織 ^{201}Tl シンチグラフィの delayed image の意義について

安久津 徹 駒谷 昭夫 間中友季子
斉藤 聖宏 高橋 和栄 山口 昂一
(山形大・放)

第31回日本核医学会北日本地方会で骨軟部組織病変への ^{201}Tl の集積の程度と、良性悪性との関係を検討した。今回は、さらに3時間後に撮像した delayed image の診断的意義を21症例について考察した。

周囲の正常組織との比較で、病変部への tracer の集積を、集積なしから顕著な集積までの 4 段階で評価し、clearance delay の有無を観察した。clearance delay を認めたのは悪性病変 5 例、良性病変 1 例の計 6 例であったが、症例数が少なく、その組織診断に明らかな傾向は認められなかった。

病変が四肢にある場合は、周囲筋組織の運動による生理的集積で修飾されることや、撮像方向の再現性などに問題が残った。

14. 骨シンチグラムにおける頭蓋骨びまん性陽性集積の成因についての検討

吉岡 清郎 福田 寛
(東北大・加齢研・機能画像)
山田 健嗣 (仙台厚生病院・放)

骨シンチグラムにおいて時に認められる頭蓋骨びまん性陽性集積につき、出現の性差・年齢差を調べることによりその成因を検討した。551 例の骨シンチグラムを対象とし、頭蓋骨びまん性陽性集積の出現頻度を男女別に 10 代ごと 80 歳代まで集計した。

頭蓋骨びまん性陽性集積は、男性では 60 歳代 2.5%、70 歳代 3.2%、80 歳代 10.0% に出現し、60 歳未満にはまったく認められなかった。女性では 40 歳代から出現し 25.0%、50 歳代 70.7%、60 歳代 60.9%、70 歳代 53.7%、80 歳代 25.0% に認められた。陽性集積は男性に比し女性で明らかに多く出現し、女性での出現率は 50 歳代で急激に上昇する。この結果は閉経後ホルモン状態の変化による骨ミネラル変動を表すと考えるのが自然と思われる。

15. 分化型甲状腺癌の ^{131}I 治療成績 ——長期生存例の検討——

丸岡 伸 山崎 哲郎 後藤 靖雄
坂本 澄彦 (東北大・放)
中村 護 (国立仙台病院・二放)

^{131}I 治療導入時からの観察期間が 10 年以上経過した分化型甲状腺癌 35 例 (平均年齢 52.7 歳) のうち、10 年以上の長期生存を認めたものは 13 例 (平均年齢 34.5 歳) で、治療回数は 1-17 回 (平均 6 回)、 ^{131}I の投与量は

3.7-71.65 GBq (平均 25.48 GBq) であった。年齢別では 40 歳未満の 10 例中 9 例、40 歳以上の 25 例中 4 例であった。組織型別では乳頭癌の 16 例中 7 例、濾胞癌の 19 例中 6 例であった。転移部位では肺 10 例中 7 例、肺骨 3 例中 0 例、骨 12 例中 2 例、リンパ節 9 例中 4 例であった。40 歳未満、微細結節型肺転移で長期生存例が多く認められ、40 歳未満の乳頭癌肺転移例は 4 例全例が 10 年以上の長期生存をしていた。骨転移例でも ^{131}I 治療を定期的に行うことにより長期生存の得られる例も認められた。

16. 甲状腺腫瘍に対するエタノール注入療法

中駄 邦博 加藤千恵次 鐘ヶ江香久子
伊藤 和夫 古館 正従 (北大・核)

甲状腺全摘後の再発乳頭癌で ^{131}I 治療が無効であった 8 症例と、切除困難と判定された原発乳頭癌 1 症例に対しエタノール注入療法 (PEIT) を施行した。現在まで治療効果の判定が可能な 8 症例 13 病巣に関しては 76.9% (10/13) が PR 以上になった。また、PEIT の 2 週間後に喉頭全摘術が施行された 1 例では推定体積 14 cm^3 に対しエタノール注入量は 6 ml であったが、摘出標本では腫瘍の約 50% 弱が壊死に陥っていた。PEIT の副作用として酩酊感、注入時の痛み、漏出したエタノールによる神経障害 etc. がみられたが、対症療法で軽減が可能であり、現段階では palliative therapy の域をでないが PEIT は有効な方法であると思われた。なお、嚢胞を有する症例にも PEIT を試みたところ 3~4 か月後には完全消失が認められ、今後良性腫瘍にも応用が可能と考えられる。

17. ^{201}Tl - $^{99\text{m}}\text{Tc}$ サブトラクションシンチグラフィによる異所性副甲状腺の局在診断

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 加藤千恵次
永尾 一彦 中駄 邦博 藤森 研司
古館 正従 (北大・核)

副甲状腺機能亢進症は大きく一次性と二次性に分類されるが、手術操作による侵襲や持続性機能亢進、ならびに再発を防ぐ点で術前にその局在を確認することは重要である。異所性の腫大に対しては ^{201}Tl - $^{99\text{m}}\text{Tc}$ サブトラ